

1. 研究目的と方法

1-1 研究目的

昭和30年代に建設された公共住宅団地は、建替が次から次ぎへと行われているが、家賃対策にみるべきものはあるものの、高齢者のための生活空間とくらし方の改変について必ずしもきめ細かい対応が行われていない。そうした状況の下で、本研究は、「ユニバーサル・デザイン」の視点から、高齢者その他の住み手にとって居心地のよい団地更新のあり方を明らかにすることを目的にしている。ここでいう「ユニバーサル・デザイン」（以下UD）とは、次の5側面をいう。第1に、バリアフリー（以下BF）の住環境整備のニーズとそれを実現する方策を明らかにし、高齢者・障害者・乳母車を押す親たち等「全ての人々にとって」の快適環境を追求する（物的BF）。第2に、高齢者は多様な住宅介護支援を求めているが、団地住民たちがそれを日常的に行いうる「ソーシャル・サポート」実践課程としての住民間の「見守り」と「見守られる」の「包括的人間交流」を指す（精神的BF）。第3に、高齢者の長年の団地居住の中で蓄えられた記憶を呼びさまし、未来に継承すべき居住資源を明らかにし、「過去と未来の融合」を目指す（時間的BF）。第4に、高齢者その他の世代の中には共に住むライフスタイルを願う人々が存在する。そのニーズの中味とそれを実現していくためのコレクティブ・ハウジングという「総合的な生活の共同化」を目指す（生活的BF）。第5に、団地更新計画において、短期から長期にわたって、「建替・改善・保全の基本的計画」の内容を明らかにすることを目指す（計画的BF）。以上のように、物的・精神的・時間的・生活的・計画的バリアフリーの多面的意味をはらむ「ユニバーサル・デザイン」の方法を、実践的調査研究として展開するところに、本研究の重要な意義がある。